

円とは何か

つい先週、新しい本を書き下ろしたばかりなのだが、一つ書きそびれたことがある。本の冒頭でこんな話をしている。

“今回の作品を書きだしてから、改めて考え直した。我々日本人は、欧米で生み出された、経済理論や投資理論では、うまく資産が増えていかないのではないだろうか。この国では、大概の文明が輸入されてきたが、こと経済や投資に関しては、予定調和的な世界はこれまでもなかったし、これからはないだろう。むしろ我々は、この国が抱える不安定さを覚悟の上で、教科書とは異なる異端の理論を生み出さないことには、この混迷の時代を生き抜くことは出来ないのではないだろうか。”（2016年夏 これから相場はこう動く）

異端の理論とは“通貨価値としての円について”である。欧米の経済理論では貨幣の価値が伸縮的に動く前提で理論が構築されている。インフレになれば物価が上がり、貨幣価値が下がる。貨幣価値が下がれば通貨価値が下がり、通貨安になる。ひいてはそれが大幅な通貨切り下げにまで追い込まれる。デフレの場合はその逆であり、これが所謂、経済理論というものである。これを応用して、金融政策が動かされている

ところが日本においては、どうもこの経済理論通りには、人々は動かない。結論を先に書くと、日本円という貨幣は、他の国の貨幣とは異なり、硬直的なのである。これは理論的にも実証されている。昔から日本の物価は卸売物価指数（今の企業物価指数）では激しく上下するのであるが、消費者物価指数のレベルでは極めておとなしい。卸売りの段階では伸縮的なのに、消費者の段階では硬直的になる。

この理由を、かつては複雑な流通システムにあるとされたが、同時に直観的には国民性にあると誰しも思うところだ。お客さんには迷惑をかけられない。ここはなんとかコストダウンで耐え忍ぼうとする企業努力があることは、みんな知っている。消費者も消費者で不断の努力を続けている。これがわが国の常識である。

実際、消費者が、少しでも安い商品を求めて走りまわる姿は感動的でもあるし、最近ではインターネットで価格情報が飛び交い、これを利用した極めて効率的な消費行動が広がっている。こうして日本経済はデフレ型、もしくはインフレに対して抵抗力の強い構造が作られている。同時にその構造は、“円”に対する強烈な信認を生み出している。

理屈では、この国の将来が暗いものであることはみんなが知っている。少子高齢化を食い止めることは出来ない。財政赤字は天文学的な数字となっており、孫の代まで解決することは不可能である。企業の生産拠点は海外へと移転が続いている。すでに多くの分野で表面上の国際競争力は失われているのだ（ただしこれはあくまで表面上の話である。本当の価値は日本が断然すぐれている。だから円の信認は続く）。

しかしこの国の多くの人間は、悲しいほど円を信頼している。いくら円の金利が低くても、例えゼロでも円の流動性を確保する。どれほど不利を訴えられても、海外に財産を移すことはないし、そもそも国を捨てる人の数は極めて限定的である。

これは戦争体験に根差すところが大きいのかもしれない。元々は1ドル1円だった通貨価値が、敗戦によって紙くずとなり、戦後これが360円、つまり360分の1にまで切り下げられて復活する。海外に預けた資産は大儲けになるのだが、日本人であることを理由に、その殆どが没収されている。

例えばこんな話がある。私がかつて駐在したことのある米国ワシントン州には、戦前、多くの日本人が暮らしていた。しかし太平洋戦争が始まると、日本人は収容所に入れられ、その資産は没収された。中でも日本人が切り拓いた土地、田畑、保有していた森林資源は一括してWというユダヤ系の不動産企業に買い取られた。その後、W社は日本人から奪った土地資源を有効活用し、米国の指折りの大企業に育った。実は、私はこのW社から木材を買い入れ日本に輸出する仕事に従事していた。この話は、現地にいる人々から聞いたのであるが、先人たちは誰もが知っていながら、誰も積極的に話そうとしない。W社の木材を日本企業が大量に買い入れていることを不快に思う人々は年々減っている。恐らく今はもういないだろう。でも、その感情はきっと何かの形で受け継がれていくに違いない。

そういった歴史を乗り越え、悲しいほどに国民は、国を愛し、円を信じている。安易に外国を信じてはいけない。ましてや外国に乗り込んで行ってはいけない。太平洋戦争における、国際的な経済体験を持つ人は少ないが、歴史に隠された事実として、日本人のDNAには組み込まれていくに違いない。

経済構造だけでなく、こうした歴史的な体験が重なり合う形で、現在の円の価値が築かれている。とりわけ変動相場制開始以降は、日本円の硬直性が確認された結果、自己循環的な円高が続いている。しかし同時にその一方で、国民は、政治に背を向け、未来を悲観し、投資に絶望している。本の中でも書いた“アンビバレント”な感情だ。複雑な感情の中で、人々は悲観し絶望すればするほど、円を信じ、円に頼り続けていく。

そんな国において、欧米で生まれた、経済理論や投資理論が、すんなりと受け入れられるはずがないだろう。もっと日本にあった、経済理論や経済政策があつてしかるべきであろう。欧米の真似をする必要はないし、真似をした結果がこれである。学者も政治家も官僚も、もっとこの国を知るべきだろう。そして日本の風土や文化に合わせた制度変更を考えるべきだろう。地方によって、世代によって、税制が変わってもいいはずだ。金利が変わっても、年金が変わっても、健康保険が変わってもいいはずだ。明治以前の世ならいざ知らず、何もかも中央集権的に、一つのマクロの公式で、答えが出せるほど現代社会もこの国も、単純ではない。やり方を変えるべきである。